

「ものづくりが好き」という シンプルな原動力。

塩山日佳瑠

縫製

服飾を専攻していた高校生の時に、学校に置いてあったジョンドルのカタログを見て、「自分もこんなカッコイイ服を作りたい」と思ったという塩山さん。お祖母様がかつて服飾の仕事をしていた関係で家に工業用ミシンがあり、縫製を身近に感じていたそうです。高校では自由にミシンを使ってよい時間があり、暇さえあればミシンを使ってもものづくりをしていたといいます。服が好き、ものづくりが好きという思いは、塩山さんの中になら変わり続け、ものづくりへの原動力となっています。

現在2年目の塩山さんですが、なんと、1年目の4月から本生産の縫製に携わっているそう。様々な条件が揃う必要はあるため、全員が同じように担当できるとは限らないかもしれませんが、手の扱い方や置き場所がよいといった「光る才能」を会社が認め、若手でも実践を積ませてくれる環境があるようです。

現在担当している業務は縫製業務の本生産、サンプル作成。本生産は複数人で仕上げますが、サンプルは一人で縫い上げるといいます。「初めてデニムシャツを縫い上げ、その製品がオンラインストアに載ったときは、『本当に自分が作ったものが売られている』と感動し、実感が湧きました。」

新しいことを次々に吸収し、ものづくりの理解と経験を深めている塩山さん。「分からないことは必ず聞いて、理解した上で作業しています。経験を積んでいくうちにわかることもあり、改善点を考えたり、他の作業との兼ね合いも考えたりしながら仕事ができるようになりました。これから業界に入る人とは歳も近いので、一緒に頑張って産地を盛り上げていきたいですね。」



もっと生の声

Q & A

- 技術を高められる時間があると聞きました。
定時後の工場は自由に使ってよい時間となっています。使ってよい材料もありますので、自分のものや大切な人のためのものを作ることができますよ。先輩方も苦労された経験があるそうで、その時間にマンツーマンで丁寧に細かく教えてくれます。
- 嬉しかったことはありますか？
商品を作るのも楽しいですが、着てもらうのを見ると更に嬉しいです。テレビで自分の作った服を着てくれている人を見たときや、友人や家族のために作ったものを着てもらって「本当に作ったの?」と褒めてもらえると、作ってよかったと思います。
- 今後取り組んでみたいことはありますか？
すべての工程において無駄なく縫えるようになって、より多くの人に自分の縫った服を着てもらいたいです。無駄な作業が多ければ、その分できるはずのこともできなくなってしまいますので、丁寧な作業を心掛けながらも効率よく仕事ができるようにしたいですね。

